放哉の秀句

生死の彼方に

上田都史

潮文社

放哉の秀句

生死の彼方に

上田都史

潮文社

放哉の秀句 新装版

上田都史（うえだ とし）
（1906～1992年）京都生まれ。
俳人。生前は句作活動の他に，自由律の俳人尾崎放哉や種田山頭火の紹介に尽力した。著書に「現代俳句の展望」，句集「喪失」「証言」「参加」，評伝「俳人山頭火」，随筆「茶の間の博物誌」等多数。

平成10年3月10日発行

著者　上田都史
発行者　小島米雄
印刷所　井上印刷

発行所　〒162-0843
東京都新宿区市谷田町 2-31
電話東京（3267）7181（代表）
振替 00140-7-69107
株式会社 潮文社

© Toshi Ueda 1998 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします
（越後堂製本）
ISBN4-8063-1311-4

まえがき

尾崎放哉は、あえて、社会の秩序からはみ出した俳人である。

放哉の句に、

夕べひょいと出た一本足の雀よ

と、いうのがある。放哉は二本足の雀より、一本足の雀の方が好きだったし、両目の人より、片目の人間の方が好きであった。

放哉は、人間知性の過信を蔑視し、世俗のモラルを嗤った。つまり、〝まとも〟はくだらなかった。財布をはたいて寒くなるのは、普通、ふところであるが、放哉は鼻が寒いという。

ここに、放哉の価値転倒の世界がある。だから、社会の約束ごとを決済する約束手形を、一枚も持っていなかった。すべてが不渡りで、社会の秩序からはよけい者になった。

放哉は、妻も、財産も、地位も捨て、そんな社会と人間を拒絶して無一物、裸一貫となった。

ある日、寂寥の深淵に立っている己の孤影にめぐり逢った。放哉は堪え難く淋しかった。それを決済してくれるものは酒であった。

人は、放哉を飲んだくれといい、忘恩の徒と蔑すんだ。しかし、そうではなかった。酒こそ、放哉に俳句と真実を伝えた恩寵であった。放哉の俳句は字面から意味を引き出すのは簡単だが、従来のいわゆる「俳句鑑賞」的な批評からは、放哉の心の深淵に迫ることはできない。

放哉は四十二歳で亡くなった。

春の山のうしろから烟が出だした

と、いう辞世の句は、放哉の生と死の讃歌であった。

一九七二年九月

上田都史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

新装版発行にあたって

『人間尾崎放哉』につづいて、ここに姉妹篇『放哉の秀句』が新装版として出版されることを嬉しく思います。著者上田都史は一九九二年死去しましたが、ふしぎな縁でその晩年を看取った私としても、本書が、現代自由律俳句の逸材尾崎放哉の人とその詩境を知る上で、お役に立つことができれば幸甚に思います。

一九九八年　春立つ日に

上田　多津子

目次

まえがき……一
寂寥の深淵……七
世俗からの超出……二三
無技巧の技巧……四一
独特の視点……五七
恋と酒の恩寵……七四
苦悩の歳月……九一
償われた代価……一〇六
俗世の秩序……一二八
物質計数の争い……一三〇

一切皆懺悔……一四〇
距離と隔絶……一四八
透明清澄な虚無……一六三
滅びた美学……一七九
生と死の讃歌……一九五

俳句索引

寂寥の深淵——須磨寺時代——

一日物云はず蝶の影さす

放哉が兵庫県西須磨にある須磨寺大師堂の堂守となったのは一九二四年で、放哉は四十歳であった。酒の上の失敗から、京都智恩院常照院を馘になった放哉は、一燈園時代の友人、住田蓮車の世話でここへ来た。

「出て行ってもらいましょう」という、和尚の一言で常照院にいられなくなった放哉は、また、一燈園の下座奉仕かと観念していたところ、捨てる神あれば拾う神ありで、寺内にある大師堂の堂守という、放哉にはうってつけの生活に恵まれた。

堂守になって忙しいのは、お盆、彼岸、毎月二十一日の大師日ぐらいのもので、お詣りに来る人のためにおみくじを抽かせたり、お蠟の銭を貰ったりするが、それ以外は、まことに静か

な独りの生活であった。

一九二四年六月から、翌年三月まで数えて九ヵ月、季節としては春夏秋冬の四季をここで過した。放哉はこの中で、社会的な地位と愛する妻とを捨てて無一文になった自分に初めてめぐり逢う。

これまでは、妻も友人も、地位も名誉も、学問も郷里も、すべて自分をとりまくものから背離し、社会と人間を拒絶したが、なおかつ、深い懐疑と混迷は長く揺曳して離れなかった。しかし、放哉は自分にめぐり逢って、いつの間にか用意された底知れぬ寂寥の深淵を発見する。

四十歳の放哉は、ここで初めて自己を肯定し、己れが抛った骸子の正しさを確認し、それを信じて疑わない不抜な精神に立つ。

放哉の俳句が、この頃から、異常な魅力を放ち初めたのも故なきことではない。

この一句、人間誰しもが臨(のぞ)む寂寥の深淵を剔抉して見事である。

秋山秋紅蓼は「『一日物云はず』という表現には、意味を越えた面白さがある。ちょうど、狂言の身振りのうちに、言葉の極限的な働きによって、人間の淋しい姿が影の動くように出ている」と云い、伊沢元美は「障子かなんかに蝶の小さな影がさし、放哉の視野をかすめたので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ある。その蝶の影を点出したことによってこの句はただに孤独感だけを感じさせるだけでなく、その孤独感が一瞬ではあるがほっと救われたような感じを我々は受けとるのである。わずか十七音足らずのものだが、ほりの深い句と云うべきである」と述べている。

なぎさふりかへる我が足跡も無く
高浪打ちかへす砂浜に一人を投げ出す

一八八五年一月二十日、放哉は白皙長身、謹厳寡黙な父、尾崎信三と、鳥取藩の御殿医福間家の貞淑温順な仲を母としてこの世に呱々の声をあげた。鳥取市の立川町にある立志尋常小学校から鳥取高等小学校に進み、一九〇二年には鳥取中学校を卒業して、この年の九月第一高等学校文科に入学した。放哉は一組であったが、二組には安倍能成、藤村操がおり、一級上には阿部次郎と荻原藤吉がいた。荻原藤吉はのちの荻原井泉水である。

放哉は一高俳句会に入って句作した。句会はよく根津八重垣町にある根津権現の境内の貸席で開かれた。ここで内藤鳴雪、河東碧梧桐、高浜虚子と顔を合わせている。この時の模様は

「人間尾崎放哉」に書いたからここでは触れない。

この頃、放哉の初恋の女、沢よし江が日本女子大学の国文科に入学している。放哉は在学中、三天坊の筆名で「俺の記」という、一種の人生論を書いた。若い放哉は、人間は何歳生きようが死んでしまえば差引堪定は結局ゼロになる。一と二と三を加えて一と二と三を引けばゼロだ。人間は死ぬまでのプロセスに意味があるだけだ。それも、畢竟、繰られているに過ぎない。と、説く。

これを書かしめたのは、まぎれもなく沢よし江で、「俺の記」は、恋の成就ならなかった失意苦悩の独白である。ここに放哉の価値転換の世界が既に芽ばえていた。

いまの東京大学、この時代の最高学府、東京帝国大学法学部を卒業した法学士、尾崎秀雄は、当然、社会人として低からぬ地位を与えられたが、のちにそれと、それによって付加され、付随して来た一切の物と心を捨てて転転居の定まらぬ生活を続けることになる。このことは、放哉の秀句を逐って順次見ていくことにするが、須磨寺の大師堂におちついて、自分の抛った骸子の正しさを確と認めた放哉が、過ぎ越し方を遙かにかえりみて詠嘆したと思われるのが、この二句である。

たった一人になりきって夕空

「久し振りに海を見てよい気持になりました。砂浜に腰を下して一人でヂッとして居ると、何とも云えない心持がします。大師堂の番が朝から夕の六時迄あるのですから、それから夕めしをたべて、此頃は七時すぎ迄あかるいですから海辺に行って見ます。暮れて行く海はホントによい。帰って来る白帆もよい。火をたいて居る漁船もよい。うしろの松に風のあるのもよい。よい気持で中々死ねさうにありません。阿々」

放哉は須磨寺からの手紙にこんなふうに書いている。海に広がる夕空の美しさは、そのまま透明な放哉の虚無の美しさでもあったろう。

この句について村尾草樹は「彼はついに須磨寺に『一人』の生活を、長年の夢を実現したとも云えようか。『たった一人になりきって夕空』——何か、ついに目的地に着いた、やれやれ……といった一安堵のひびきがその『夕空』に詠い出されている。季節もこのとき六月であって、彼の好まなかった寒い冬からも当分別れてのびのびとその孤独を愉しんでいるような作と

なっている」と、書いている。まことに同感で、ここには、寂寥の中の放哉の安堵とほのぼのとした愉しみがある。

伊沢元美は「『たった一人になり切った夕空』ではないのである。『たった一人になりきって』のところに大きな休止がある。古風に云えば『て』が切字となる。それ故に『夕空』はこの句全体に光被しているのである。『……なりきった夕空』とすると『夕空』は説明的に投げ出されたものにすぎなくなる。そして一句の幅がせまくなる。……日が暮れかかってめっきり人の影がとだえてしまうと『たった一人』という意識がよみがえるのである。ふと仰ぐと日の光も消えて水のようにあわあわとした空である。毎日のことながらこの夕空をだまって見あげる放哉である」と、夕空を眺めやる放哉を浮彫りにしている。

軽いたもとが嬉しい池のさざなみ

朝顔の白が咲きつづくわりなし

蛙の子がふえたこと地べたのぬくとさ

銅銭ばかりかぞへて夕べ事足りて居る

鳩がなくま昼の屋根が重たい
ふくふく陽の中たまるのこくづ
藁屋根草はえれば花さく
ねむの花の昼すぎの釣鐘重たし
ほのかなる草花の匂を嗅ぎ出さうとする
木魚ほんほんたたかれまるう暮れて居る

須磨寺は真言宗で寺格、寺域ともに宗内有数の大寺院であった。その寺内にある大師堂での独りの生活は、ただに自分にめぐり逢っただけでなく、放哉自身の俳句の発見でもあって、須磨寺時代は放哉にとって極めて重要な一時期である。ここで放哉はたくさんの秀句を書いている。

一燈園では、樹下石上と心得よ、という園の掟に従って、朝は五時に起床、掃除が済むと道場で一時間ほどの読経があり、それから、その日の働き先へ、遠い所は四キロも八キロもてくてく歩いて行く。働きに行くことを托鉢と園ではいう。その働き先は種々雑多で、菓子屋、簡

易食堂、饂飩屋、米屋、ボール箱屋、宿屋そのほかで、仕事の内容は便所掃除、草むしり、薪割り、炭切り、引越や大掃除の手伝などである。いずれも肉体労働で、托鉢先で一日じゅう働き、夕飯をよばれて帰ると、また、一時間ほど読経をして煎餅布団にくるまって寝る。四十歳の放哉はくたくたになって、手紙を書く暇も根気もなかった。

それから思えば、大師堂はほんとに恵まれていた。「軽いたもとが嬉しい池のさざなみ」こんな俳句は、一燈園では間違っても作れなかった。

赤とんぼ夥しさの首塚ありけり

夕べ落葉たいて居る赤い舌出す

ただ風ばかり吹く日の雑念

たばこが消えて居る淋しさをなげすてる

めしたべにおりるわが足音

はかなさは燈明の油が煮える

のら犬の背の毛の秋風に立つさへ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.